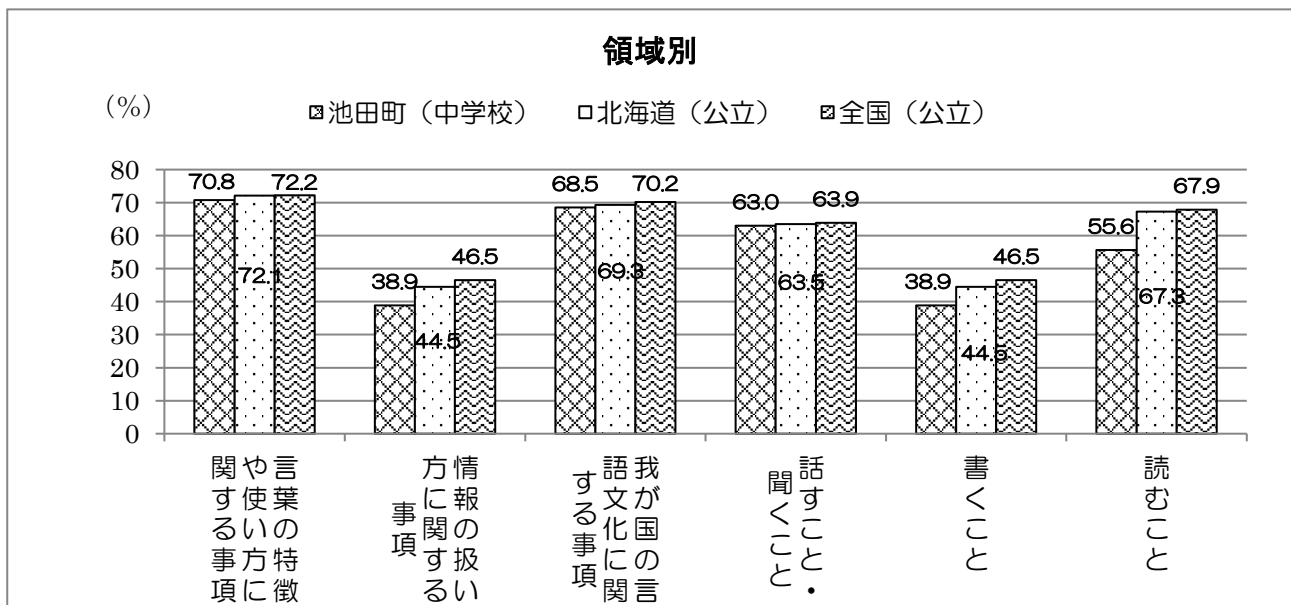
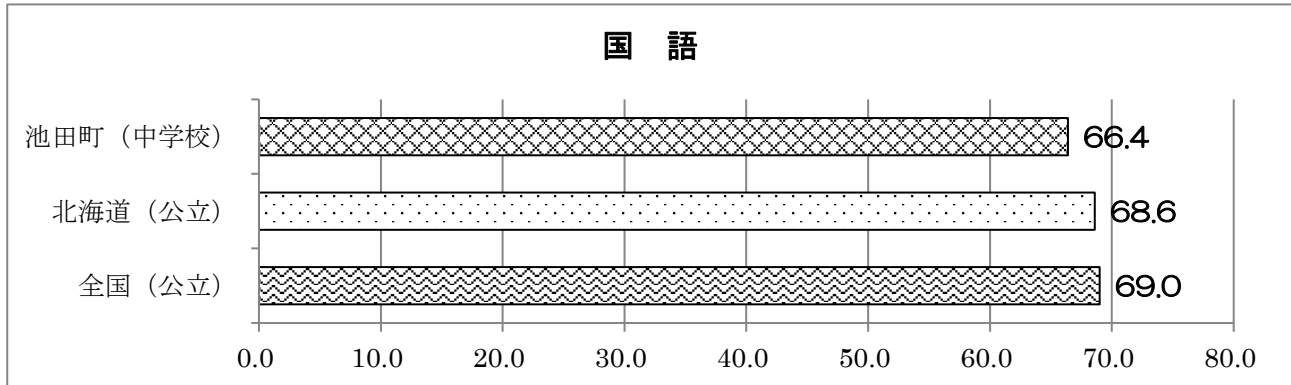


## 令和4年度 全国学力・学習状況調査結果等について (中学校)

## 1 国語

(1) 調査結果 平均正答率 (%) : 池田町 66.4 (全道 68.6 全国 69.0)



全国の正答率と比較すると国語は 2.6 (昨年 国語 0.4↓) ポイント下回り、昨年より差がやや広がった。領域別に見ると本町の子どもたちは、「話すこと・聞くこと」の領域が全国とほぼ同水準であり、「読むこと」の領域に最も課題が見られた。

(2) 成果と課題 (□望ましい ■改善を要する ★無回答率が高い (↑↓) 全国との±の差)

□「言葉の特徴や使い方に関する事項」の「表現の技法について理解する」ことが全国を上回っている。

〔「陽炎みたいに揺らめきながら」に使われている表現の技法の名称を書き、同じ表現の技法が使われているものを選択する。 問題3ー 61.1% 8.6↑〕

□「話すこと・聞くこと」の領域の「論理の展開などに注意して聞く」ことが全国を上回っている。

〔話の進め方のよさを具体的に説明したものとして適切なものを選択する。 問題1二 69.4% 4.3↑〕

□「我が国の言語文化に関する事項」の「漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解する」ことが全国を上回っている。

[書き直した文字の「と」の書き方について説明したものとして適切なものを選択する。問題 4 三 83.3% 2.2↑]

- 「読むこと」の領域の「場面と場面、場面と描写などを結びつけて内容を解釈する」ことに課題がある。

〔「おれ」は何を「なるほど」と思ったのかについて、話の展開を取り上げて書く。問題 3 四 58.3% 15.5↓〕

- 「読むこと」の領域の「場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基に捉える」ことに課題がある。

〔話の展開に沿って「おれ」の行動や心情を並べ替える。問題 3 三 52.8% 9.2↓〕

- 「情報の扱い方に関する事項」及び「書くこと」の領域の「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く」ことに課題がある。

〔農林水産省のウェブページにある資料の一部から必要な情報を引用し、意見文の下書きにスマート農業の効果を書き加える。問題 2 三 38.9% 7.6↓〕

- ★無解答率が最も高くなった問題は、「言葉の特徴や使い方に関する事項」及び「話すこと・聞くこと」の領域の「自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話す。(問題 1 三)」である。【本町 27.8% 全国 16.2%】

### (3) 課題解決に向けた学習指導に当たって

#### ■問題 3 四「場面と場面、場面と描写などを結びつけて、内容を解釈することができるかどうかをみる設問」

- ◇ 文学的な文章を読み味わう際には、個々の場面や描写から直接分かることを把握するだけでなく、話の展開を捉えて、複数の場面を相互に結び付けたり、各場面と登場人物の心情や行動、情景等の描写とを結び付けたりすることによって、場面や描写に新たな意味付けを行うことが大切である。その際、作品の特性に応じて、第 1 学年〔知識及び技能〕の(1)「オ 比喩、反復、倒置、体言止めなどの表現の技法を理解し使うこと。」や、第 2 学年〔知識及び技能〕の(2)「イ 情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うこと。」などとの関連を図ることが有効である。

#### ■問題 3 三「場面の展開や登場人物の心情の変化などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる設問」

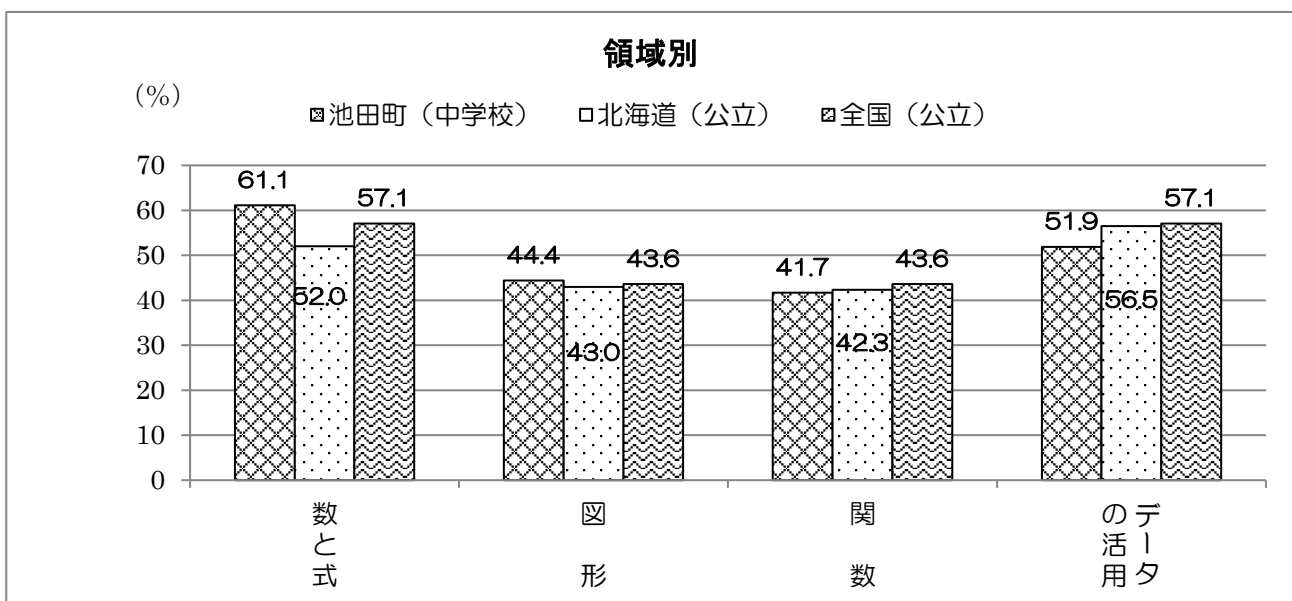
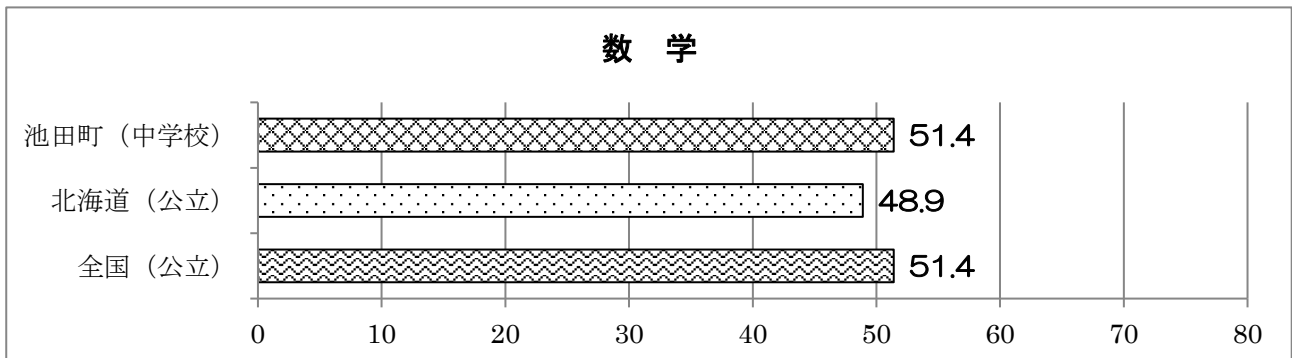
- ◇ 文学的な文章を読む際には、文章の中の時間的、空間的な場面の展開、登場人物の相互関係や心情の変化、行動や情景の描写などに注意しながら読み進めることが大切である。その際、第 1 学年〔知識及び技能〕の(1)「ウ 事象や行為、心情を表す語句の量を増やすとともに、語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。」との関連を図り、細部の描写にも着目しながら物事の様子や場面、行動や心情などの変化を丁寧に捉えていくことが有効である。

#### ★問題 1 三「自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫して話すことができるかどうかをみる設問」

- ☆ 自分の考えが分かりやすく伝わるように話すためには、聞き手に応じた語句を選択したり、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、言葉遣いなどに注意したりするなどして、表現を工夫することが大切である。指導に当たっては、第 1 学年〔知識及び技能〕の(1)「ア 音声の働きや仕組みについて、理解を深めること。」との関連を図り、アクセント、イントネーション、プロミネンス(文中のある語を強調して発音すること)などの音声的特質が多様な声を作り出し、話したり聞いたりする活動に影響していることが認識できるように、実際に声に出しながら工夫を考えたり効果を確かめたりすることが重要である。

## 2 数学

(1) 調査結果 平均正答率 (%) : 池田町 51.4 (全道 48.9 全国 51.4)



全国の正答率と比較すると数学は全国と同値（昨年 数学 2.8↓）となり、学力の改善傾向が見られた。領域別に見ると本町の子どもたちは、「数と式」、「図形」の領域が高く、「データの活用」の領域に最も課題が見られた。

(2) 成果と課題 (□望ましい ■改善を要する ★無回答率が高い (↑↓) 全国との±の差)

- 「数と式」の領域の「自然数を素数の積で表すことができる」ことが全国を上回っている。  
〔42を素因数分解する。問題1 66.7% 14.5↑〕
- 「数と式」の領域の「問題場面における考察の対象を明確に捉えることができる」ことが全国を上回っている。  
〔同じ偶数の和である  $2n+2n=4n$  について  $n$  が9のときどのような計算を表しているかを書く。問題6(1) 83.3% 9.5↑〕
- 「データの活用」の領域の「多数の観察や多数回の試行によって得られる確率の意味を理解している」ことが全国を上回っている。  
〔容器のふたを投げたときに下向きになる確率を選ぶ。問題5 91.7% 8.4↑〕
- 「データの活用」の領域の「データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる」ことに課題がある。  
〔コマ回し大会で使用するコマをヒストグラムの特徴を基に選び、選んだ理由を説明する。問題7(1) 30.6% 13.4↓〕

- 「数と式」の領域の「結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができる」ことに課題がある。

[ある偶数との和が4の倍数になる数について、予想した事柄を表現する。問題6(3) 25.0% 12.6↓]

- 「データの活用」の領域の「箱ひげ図から分布の特徴を読み取ることができる」ことに課題がある。

[箱ひげ図の箱が示す区間に含まれているデータの個数と散らばりの程度について正しく述べたものを選ぶ。問題7(2) 33.3% 10.8↓]

- ★無解答率が最も高くなった問題は、「図形」の領域の「筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができる。(問題9(2))」である。【本町 58.3% 全国 38.5%】

### (3) 課題解決に向けた学習指導に当たって

- 問題7(1)「データの傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる設問」

- ◇ データの分布の傾向を読み取って判断し、その理由を数学的な表現を用いて的確に説明することが大切である。

本設問を使って授業を行う際には、コマAとコマBのどちらのコマがより長く回りそうかを話し合う場面を取り入れることが考えられる。その際、図1、図2の二つのヒストグラムの特徴を比較して、それぞれの分布の様子を読み取った上で、コマを選ぶ根拠を、最大値、最小値、範囲、累積度数などといった指標を用いて記述できるようにすることが大切である。

- 問題6(3)「結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見だし、説明することができるかどうかをみる設問」

- ◇ 与えられた事柄や予想した事柄が成り立つかどうかを、具体例をあげて調べる活動を通して、結論が成り立つための前提を捉え、見いだした事柄を数学的に表現できるように指導することが大切である。

本設問を使って授業を行う際には、「差が4である2つの偶数の和は、4の倍数になる。」ことから、他にはどのような2つの偶数であれば、その和が4の倍数となるか説明する活動を取り入れることが考えられる。その際、成り立つ事柄を予想するために、具体的な数を用いて和が4の倍数になる2つの偶数について取り上げ、その2つの偶数にどんな特徴があるのかについて話し合う場面を設定することが考えられる。このように、結論が成り立つための前提を捉えることができるようにすることが大切である。

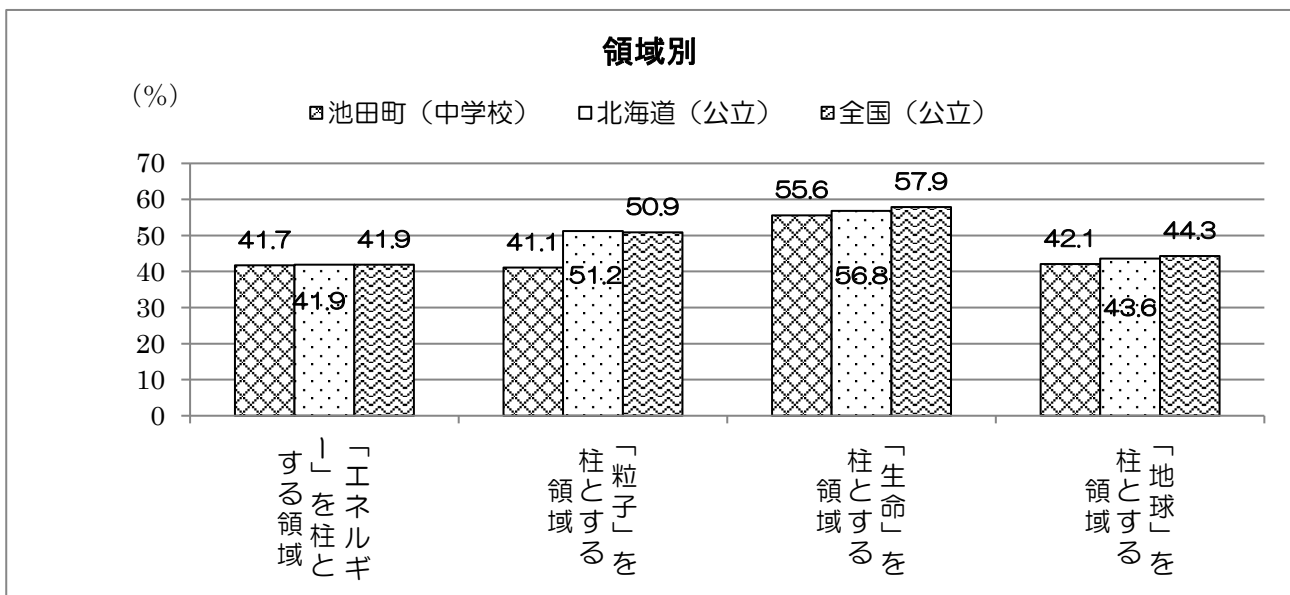
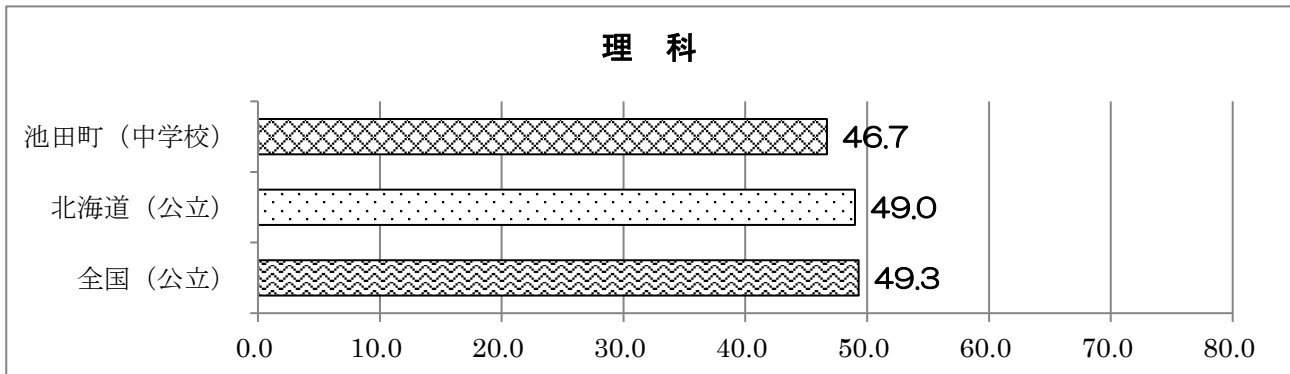
- ★問題9(2)「筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる設問」

- ☆ 結論を導くために何が分かればよいかを明らかにしたり、与えられた条件を整理したり、着目すべき性質や関係を見だし、事柄が成り立つ理由を、筋道を立てて考えたりする活動を取り入れ、数学的に説明できるように指導することが大切である。

本設問を使って授業を行う際には、コンピュータなどを利用して長方形ABCDの辺の長さをいろいろに変えた図を観察し、線分EBと線分BFのなす角である $\angle EBF$ が $60^\circ$ になることを予想する場面を設定することが考えられる。その上で、予想した事柄が一般的に成り立つことの理由を数学的に説明する場面を設定することが考えられる。

## 3 理科

(①) 調査結果 平均正答率 (%) : 池田町 46.7 (全道 49.0 全国 49.3)



全国の正答率と比較すると理科は 2.6 (前回 理科 6.7↓) ポイント下回ったが、前回 (H30 年) より学力の改善傾向がみられた。領域別に見ると本町の子もたちは、「エネルギー」を柱とする領域が全国とほぼ同水準であり、「粒子」を柱とする領域に最も課題が見られた。

(2) 成果と課題 (□望ましい ■改善を要する ★無回答率が高い (↑↓) 全国との±の差)

- 「エネルギー」を柱とする領域の「日常生活や社会の中で物体が静電気を帯びる現象を問うことで、静電気に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる」ことが全国を上回っている。  
〔日常生活の中で、物体が静電気を帯びる現象を選択する。問題 1 (1) 52.8% 8.6↑〕
- 「エネルギー」を柱とする領域の「課題に正対した考察を行うためのグラフを作成する技能が身に付いているかどうかをみる」ことが全国を上回っている。  
〔「ばねが縮む長さは、加える力の大きさに比例するか」という課題に正対した考察を行うために、適切に処理されたグラフを選択する。問題 5 (2) 52.8% 7.8↑〕
- 「生命」を柱とする領域の「複数の脊椎動物の外部形態の考察を行う場面において、あしの骨格について共通性と多様性の見方を働かせながら比較し、共通点と相違点を分析して解釈できるかどうかをみる」ことが全国を上回っている。  
〔脊椎動物には骨格のつくり共通点があることから、カラスの関節 A に対応するヒトとカエルのあしの関節を選択する。問題 4 (2) 72.2% 6.6↑〕

- 「粒子」を柱とする領域の「水を電気分解して発生させた水素を燃料として使う仕組みを探究する学習場面において、粒子の保存性の視点から化学変化に関わる水の質量が変化しないことを、分析して解釈できるかどうかをみる」ことに課題がある。

[水素を燃料として使うしくみの例の水の質量の変化について、適切なものを選択する。問題3(2) 44.4% 15.8↓]

- 「エネルギー」及び「粒子」を柱とする領域の「化学変化に関する知識及び技能とエネルギーを柱とする領域の知識及び技能を関連付け、水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとして必要なものを分析して解釈できるかどうかをみる」ことに課題がある。

[水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとを指摘する。問題3(3) 11.1% 13.7↓]

- 「粒子」を柱とする領域の「実験の結果が考察の根拠として十分かどうか検討し、必要な実験を指摘して、実験の計画を改善できるかどうかをみる」ことに課題がある。

[吸湿発熱繊維に水蒸気を多く含む空気を通した一つの実験だけで行った考察について、課題に正対しているかどうかを検討し、必要な実験を指摘する。問題7(2) 41.7% 11.7↓]

- ★無解答率が最も高くなった問題は、「エネルギー」を柱とする領域の「考察の妥当性を高めるために、測定値の増やし方について、測定する範囲と刻み幅の視点から実験の計画を検討して改善できるかどうかをみる。(問題5(3))」である。【本町 44.4% 全国 29.4%】

### (3) 課題解決に向けた学習指導に当たって

- 問題3(2) 「水を電気分解して発生させた水素を燃料として使う仕組みを探究する学習場面において、粒子の保存性の視点から化学変化に関わる水の質量が変化しないことを、分析して解釈できるかどうかをみる設問」

- ◇ 身近な現象を科学的に探究する上で、化学変化に関する知識及び技能を活用して、化学変化を粒子の保存性に着目し、分析して解釈することは大切である。

指導に当たっては、水の電気分解などの化学変化を原子や分子のモデルで表す学習場面を設定し、化学変化に関係する原子の種類や数が増えないことに気付くようにすることが考えられる。

その際、原子や分子のモデルで表した複数の化学変化を比較し、粒子の保存性に気付くようにすることが重要である。

- 問題3(3) 「化学変化に関する知識及び技能とエネルギーを柱とする領域の知識及び技能を関連付け、水素を燃料として使うしくみの例の全体を働かせるおおもとして必要なものを分析して解釈できるかどうかをみる設問」

- ◇ 身近な現象を科学的に探究する上で、化学変化とエネルギーを柱とする領域の知識及び技能を関連付け、分析して解釈することは大切である。

指導に当たっては、水の電気分解や水素の燃焼などの化学変化には、電気、熱、光などエネルギーを柱とする領域が関連していることに気付くようにすることが考えられる。

その際、化学変化を起こすきっかけとなるエネルギーの形態だけでなく、それらが生み出される過程について触れることも重要である。

- ★問題5(3) 「考察の妥当性を高めるために、測定値の増やし方について、測定する範囲と刻み幅の視点から実験の計画を検討して改善できるかどうかをみる設問」

- ☆ 身近な物理現象を科学的に探究する上で、考察の妥当性を高めるために、実験結果の処理について振り返り、実験の計画を検討して改善することは大切である。

指導に当たっては、本問のように、測定値の不足から妥当性の高い考察が行えない場合、測定する間隔や範囲などの改善点を明確にし、それらを基に実験の計画を検討して改善する学習場面を設定することが考えられる。